

# 中臣遺跡の方形周溝墓

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 中臣遺跡第76次調査の方形周溝墓 中央が2号墓、右に1号墓(南東から)

1997年5月から6月にかけて実施した京都市山科区の中臣遺跡第76次調査では、弥生時代中期の初め頃(紀元前150～100年頃)に造られた方形周溝墓を3基発掘しました。この3基の方形周溝墓は、周囲の溝がしっかりと残った、保存状態の良いものでした。

方形周溝墓は文字通り四角く周囲に溝をめぐらした墓なのですが、それがどのような墓であったのか次にみることにします。

墓の造りかたは、溝を掘りくぼめた時に出る土を用いて内部を盛り上げ、低い土饅頭の墳丘を造ります。そして、墳丘上に穴(墓壙)を掘り、遺体をいれた棺を安置し

ます。まれに周囲の溝の中にも棺などを安置することもあります。棺の数は複数あるのが普通で、また男女がペアで葬られていたり、子供用の棺があることから、家族墓であったと考えられています。

区画の形には方形と円形などがありますが、ともに方形周溝墓の仲間です。

これまでのところ、最古の発見例は、大阪府茨木市の東奈良遺跡で見つかった、弥生時代前期中頃の方形周溝墓です。これ以後、古墳時代の前期頃まで各地で造られ続けます。

さて、今回調査した3基の方形周溝墓は、溝が重なった状態で発

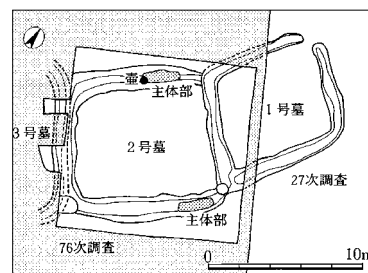


図1 方形周溝墓の配置図

見されました。溝の埋まり方を観察すると、最初に中央にある2号墓が造られたことがわかりました。引き続き1号墓と3号墓が造られていますが、どちらが先かはわかりませんでした。

1号墓と2号墓の溝で囲まれた内部の面積は、41㎡と58㎡になります。3号墓の大半は、調査地外へとのびているので大きさはわ

かりません。区画をつくる溝は、幅が0.6～1.7m、深さは0.2～1.0mありますが、2号墓の溝が一番幅広く、かつ深く掘られていました。また、この2号墓の北西側と南東側の溝の中に木棺を安置したとみられる主体部がありました(写真2)。これは、京都市内で調査した方形周溝墓では東土川遺跡(京都府埋文センターが1996年に調査)について2例目の発見となりました。1～3号墓の墳丘は後の時代に削られて残っていませんでしたので、残念なことに墳丘に何体葬られていたかはわかりません。

溝の中からは、なぜか壺形土器のみが出土しています。土器には、先端が分かれた工具を使って、直線や扇形などの文様が描かれていました。このような文様や壺の形の特徴から、弥生時代中期前半に作られたことがわかりました。土器の表面にはあまり風化していない部分がありますが、この部分は



写真2 2号墓北西周溝内の主体部  
土の白い範囲が木棺の痕跡とみられる

墳丘に供えられていた状態を考えると参考になります。

調査地の付近ではこれまでも同じ頃の方形周溝墓や、土壙墓(墓壇に遺体を納めただけの簡素な墓)などが見つかっています。今回の発見によって、このあたりが弥生時代中期前半頃の墓地であったことがはっきりしてきました。このような墓地は、遺跡の東部に



写真3 2号墓周溝内出土の壺形土器  
黒い部分は器表の保存状態が良い

も1箇所あります。

このように中臣遺跡では弥生時代の墓地は次第に明らかとなりつつありますが、この頃の住居跡は未発見のままで、遺跡がどの程度広がっていたかはわかっていません。これからも調査を続けていくことで、この遺跡の姿をより明らかにしたいと思っています。

(平方 幸雄)



図2 弥生時代の中臣遺跡の墓地 第1・27・44・76次調査をもとに南から見た推定図